

令和8年度人権教育推進協議会
「部落問題と『出会う』
—マイノリティ当事者がみる世界から—」

話題提供: 澤井未緩(大阪公立大学人権問題研究センター特任研究員)

きょうの流れ

- きょうのテーマ
- 講師の自己紹介
- 生い立ちから見る部落問題
 - 歴史を踏まえて
 - 小学校から大学までの歩み
- マイノリティ側から見るこの社会について
 - 差別はあるのに、ない
 - 研究からわかったこと
 - 差別の構造
 - マジョリティの都合のよさ
 - 差別を超える
- 最後に

きょうのテーマ)

①当事者からみる部落問題/差別とは、どのような様相をしているのか。
または、どのような意味があるのか。

(個人が部落問題をどのように見つめているのか、というフェーズ)

②研究からみる部落問題/差別は、どのように捉えられるのか。または、
どのように立ち現れるのか。

(社会が部落問題をどのように見つめているのか、というフェーズ)

この両輪で語ることをめざします！

★全体を通して留意してほしいこと

わたしは、「部落出身者」という多様性に富んだ当事者のうちの、ひとりです。部落出身者の、マイノリティの、代表者ではありません。ほかの当事者の代弁はしません。わたしはわたしの言葉で、経験を語ります。

自己紹介 🌸

- 大阪のある被差別部落で生まれ育つ
 - 同和対策事業特別措置法が失効した2002年当時、小学2年生だったので、対策事業がなされていた時代をほとんど知らない世代
 - 私の地域は特措法失効後も運動や同和教育が比較的さかんに行われているところだったため、幼少期からこの社会にある差別の話についてはよく聞かされていた
- ☞ この状況がおいおい複雑さを招くことに

マイノリティ側から見るこの社会について🌍

差別はそこにあるのに、ない

- 2002年に同和対策事業特別措置法が失効したあと、部落差別は解決したという意識が広まるなかで、社会から「ない」とみなされてきた部落差別は、よく分からないけど身近な、「そこにある」ものだった
- 差別なんてないという社会のなかで、「差別される者として存在する私」は一体何者なのか？自分自身を説明できる言葉がこの社会にはないという感覚

部落出身当事者は社会をどのようにみてきたか

- 『部落差別はあった。でもそれは過去の話で今はない』という言葉によって、私の抱える葛藤や痛みをないものとして扱われている、忘れろと言われている
- 部落差別は『(たぶん)ある』のに、社会からは『ない』と言われている感覚が、自分自身の存在を透明人間のようにさせているようで苦しかった
- なぜこんな『ねじれ』が発生するのか、私と、目の前のあの子とでは、なぜこんなにも見え方が違うのか...

研究のこと①

ボンディ(2015)によると

- 部落出身者の「Invisibility」と部落問題に対する「Social Silence」
 - 「不可視である」という特質と2種類の「沈黙」
- 特措法が失効して以降、部落問題は「解決済み」「ないもの」とされている

★結果として差別を助長する構造が社会に温存されたまま

研究のこと②

阿久澤(2017)によると

- 特措法失効後、部落問題の学び方に変化があった
- 地域を特定することは差別であるという行政的な認識が広まり、学校も当事者との『出会い』を通じた学習やフィールドワークは行いにくくなり、『部落差別はいけないことだ』と教えるに留まった

研究のこと③in the America

- 2018年11月～2019年2月、アメリカのメリーランド州立大学にてインタビュー実施 
- よく聞かれたこと：
 - 『部落差別ってなに？ということ？』
 - 『なんで？』『どうして？』
 - 『肌の色も人種も違わないのに？』
 - 『みんな同じなのにどうして差別がある？』
 - 『なんでいまもある？？？』
- ▶「みんな同じ」から生まれる「差別の理不尽」をあらためて実感
- ▶部落差別について、生活のなかで語らない・語れない日本の土壌

「差別する」という行為を考える①

☆部落の人が差別される理由とはなにか？

齋藤(2017)によると...

- ・近世身分制にもとづく？差別...「身分・家柄ちがう」
- ・近代化とレイシズム...「人種ちがう」
- ・近代化と優生学・遺伝学的な言説...「血族結婚してるから遺伝的に問題がある」
- ・近代化による窮乏化と、衛生概念...「貧しい」「汚い」

「差別する」という行為を考える②

- ・差別に対する抵抗への「犠牲者非難」…「怖い」「危険」
- ・食肉産業などへの蔑視…「残酷」
- ・「ねたみ意識」「新しいレイシズム」…「ずるい」「不当な特権」
- ・理由はわからないけどリスクとして…「みんな避けてるから」「親が行ってはいけないって言うから」

「差別する」という行為を考える③

- 「**差別する理由・根拠**」はさまざま
→差別する側の都合のいい解釈によって差別は起こる
- いままで、なぜ部落の人は差別されるのか？を考えてきたが、それは結局、部落の人が変わりさえすればいいという議論になりかねない。
- そうではなく「ひとはなぜ差別をするのか？」を考えないといけないのではないだろうか？
- 「差別されている人々」のことは学んでも「差別している人々」のことは学んでいない。

アウティング：

- 本人の意思にかかわらず、第三者に当事者の出自や性的指向をさらすこと
- 「差別を無くしたい」や「あなたには知ってほしい」という思いをすべて無視して勝手に第三者にさらすことは暴力行為。
- 本人の意思によってなされる「カミングアウト」とは意味が全く異なるという前提が共有されていなかった
- **情報のコントロール権**…いつ/どこで/誰に/どのようにという選択肢は本人にのみゆだねられている(今日はOk、あしたは無理)

マイクロアグレッションとは：

ステレオタイプや偏見に基づく言動のうち、目に見えにくい、しかし受け手にダメージを与えるようなもの。

- 『マイクロアグレッションとは、日々のありふれた言葉、行動、または環境の面での侮蔑的な行為で、意図的かどうかにかかわらず、有色人種に向けて彼ら・彼女らを軽視し侮辱するような敵対的、中傷的、否定的なメッセージを送る。マイクロアグレッションの**犯人はたいていの場合、人種的／民族的マイノリティとの対話のなかでそうしたメッセージを伝えていることに気づかない。**(Sue et al. 2007: 271)』
- ex; (どこの国がルーツか分からない人に対して)「ナニジンなの？」
- →あなたのナショナルリティが外見では分からないというメッセージになりうる
- (日本にいる「外国人」に対して)「日本語上手ですね！」
- →その人はもしかすると日本生まれ日本育ちなのかもしれない
- (女性/男性に対して)「彼氏/彼女いるの？」
- →相手が異性愛者であるという前提での質問になっている

部落問題におけるマイクロアグレッション はどんなものが考えられるか？

【部落問題にかんする教育・啓発の場で】

『え一部落問題またやるん？』『むかしの話じゃないん？』

『わざわざ教えるから差別が余計に増える』

【生活の場で】

『あっこって治安悪い(地価安い)よな』

* 発言以外にも;天皇制・戸籍制度・婚姻制度を擁護する姿勢

【『部落出身である』と伝えられた場で】

『わたしは気にしやんで』『わざわざ言わんでもいいことなんちゃう？』

※これはあくまでも私の考えで、当てはまらない部落出身当事者もいます。
グラデーションであることをどうか忘れないでほしい！

差別の構造を考える

・差別行為への告発の難しさ = 沈黙効果(差別体験を目の前に、その体験者が瞬間的に黙ってしまうこと)、二次被害への恐怖

「あなたにも非があったんじゃないの?」「それも自己責任でしょ」という「犠牲者非難」
差別の告発が、出自の告白とイコールになってしまう二重の困難

★差別を告発するむずかしさ、声を上げるむずかしさ

★差別はそもそも見えにくい、見ようと思わないと見えない、『あるのに、ない』

Ex;「#MeToo」はなぜ始まったのか?

→「私は差別/被害を受けた」という告発は、自分自身の存在を世間にさらすリスクが伴う。それにより「被害は思い込みじゃないのか」「あなたにも非があるのではないか」という二次被害が起こりやすい。SNSの匿名性の高さを利用して、告発のハードルを下げることにより多くの女性サバイバーの性被害が明らかになった

「差別」を超える

- ・差別/被差別の関係性は決して固定的なものではなく、社会的な状況によって変わる。

→ある場面において自分はマイノリティでも、場所やカテゴリーを変えればマジョリティになる

Ex; 日本人/外国人、障害者/健常者、部落地区住民/一般地区住民、女性/男性

- ・**マイノリティの存在は、「見ようとしなければ見えない」もの**

→差別するという行為を超えていくには、自分の中にある「差別意識」、それに対してどれだけ自覚的でいられるのかが大切

差別はどこにある？

- 部落出身当事者がいないから部落問題を学ぶ必要性がない？

☞①「部落出身当事者がいない」と断定できるのはなぜ？
言いきれてしまう、いないとジャッジできる立場って？

②障害者問題やいじめの問題は、その当事者がいなくとも学習するはず。
なぜ部落問題だけ、必要あるかどうかを語られるのか？

最大の問題は、「部落問題」や「部落差別」がこの社会に「ある」という現実が全く共有できていないこと。

「差別をする」というよりも、社会に「差別はある」という現実から始めませんか？

多様性を「認める」？

①私たちが暮らすこの社会は、【**すでに多様である**】ということ

②そして多様であること、多様であるひとが暮らす(存在する)ことに、【**他者の承認など必要がない**】ということ

★「そういう人たちもいていいよね」「受け入れる(理解する)べき」というとき、それ、どっから目線！？！？と思います。なぜ、あるひとが存在することに、誰かの許可や、理解が必要なのか？そのまなざしこそなんやねん！？！ということを問い続けたいです。

人権教育とはなにを学ぶのか？

- 人権教育や人権学習は、「人権を必要とするマイノリティのことを学ぶ」時間であると考えるひとが多数。
- 人権はマイノリティのための専売特許ではなく、すべてのひとにあるもの。人権は施しや思いやりではない、という考えであればこの発想は生まれないはず。
- また、人権教育や人権学習はそういったマイノリティ(社会的弱者)について学ぶのではなく、「じぶんと人権のかかわり」を考えることを通してじぶんの立場やアイデンティティに向き合いながら、よりよい社会を志向していくもの(じぶんを通して他者を見るような、そんな感じ)。

「人権を教える」？いえいえ、あなたも権利主体ですよ

- これまでの学校生活のなかで人権学習を受けていたみなさんに聞いてみたいのは、人権学習の時間を思い返したとき、「自分」はそこにいたか？ということです。
- 「人権とはすべての(あらゆる)ひとのものである」と言うとき、そのすべてのひとに自分は含まれることをどれだけ意識できていたか？**どこかで、「自分とは関係のない話」と思っていなかったか？**
- もっと言うと、**「人権学習とは、社会的弱者(障害のあるひと、高齢者、外国籍のひとなど)」のことを学ぶ時間であって、自分とはかかわりがない」**と考えていなかったか？

「人権を教える」？いえいえ、あなたも権利主体ですよ

- たとえば、障害者問題学習は、障害とは何かを考えたり、どうすれば手助けできるのかを考えたり、「障がいのあるひとのこと理解しましょう」「何に困っているのかを考えましょう」と言ったりすることで、**「障がいのあるひとのこと」を学ぶ(=対象化する)ことだと考えること**はないですか？
- ここに、「自分」はいるでしょうか？自分は「弱いひとたち」を一方向的に「理解する」ひとになってないでしょうか？
- **障害があるひとが「弱いひとたち」と据え置かれる社会のあり方そのものを振り返る視点、自分はその社会にどのようなかかわっているのかを考える視点をもっているでしょうか？**

差別はいけないことか？

「差別は良いことですか？」と問われて、「良いことです」という人はほとんどいないだろう。多くの人が反射的に「いけないこと」だと答えるし、それが社会の常識とされている。

「差別はいけないこと」と、多くの人頭では理解している。

けれど社会から差別が無くならないのはなぜだろうか？

ヘイトスピーチや相模原障害者施設殺傷事件が起こるのはなぜだろうか？異性愛者よりも同性愛者の方が自殺率が高いのはなぜだろうか？

差別する人は悪い人。自分はそんな悪い人間ではない。

「自分は差別しないから大丈夫」とどこかで思っていないだろうか？それは本当だろうか？

時折、「自分は差別しないのであまり関係ないです」という声を聞くことがある。

何度も繰り返している通り、差別の問題は差別する側の問題であり、わたしたちは差別の種である偏見とは無関係にいることはできない。誰しもが無意識に他者に対する偏見や自分に都合のいい前提を持っている。それらに無自覚でいる態度こそが差別を生み出している。

差別問題に無関係な人はいない。社会で起こっているあらゆる問題は、対岸の火事ではなく、「あの人たちの問題」なのでもなく、「わたしたちの問題」である。

伝えたいこと

- マイノリティ側にとって「差別」はすぐそこにあるもの

→「部落差別なんてもうないやん」と言われると、私がいま抱えている苦しみは妄想なのか？と言いたくなる

- 日々の生活と差別が密接に結びつく

- 「どこに住んでんの？」「どこで働いてるん？」

- 世界は自分用には作られていない、社会からうっすら嫌われていることに気づかされる

- その事実を、現実を、**淡々と生きる日々**

- 青年部として地元の高校生や若い青年をみて感じていること
→10年前の自分の姿とそのまま重なる
- 「強い」とか「かっこいい」という言葉はその場限りの癒しにしかない
→当事者をたたえるのではなく、差別のない社会をともに目指してほしい
- 「人権問題をどう捉えるのか」というのは自分の生き方に直結すると思う
→人権はひとの生活と、尊厳と、命の話。差別に対してどのような態度を取るのか、曖昧な態度ではなくきっちりと示していくこと。

- わたしには長らくロールモデルがおらず、荒れた大人たちを目の前に出自を殺すことでしかちゃんと生きられないと信じていた時期あった
- 大切なものを大切にできない自分の弱さを恥じながら、それでも学び続ける意志だけは失わなかったこと、その一点が私の誇り
- 自分の存在をどのように説明すればいいのか、それらの言葉を持たずに悩み続けた小さかった頃のわたしのために
- 本来であれば説明する必要がない、存在を証明する必要がない世の中に

あなたに、わたしに、できること

- 『目の前にいるひとを傷つけない』だからこそ、何をどう言えばいいのか、できるのか、思い悩む
- 『差別したくない』と思うことは大切だけど、ある立場にいただけで自動的に差別をしてしまう(それが差別の「構造」です)可能性は誰にだってある
- 差別をするのが怖い、自分の責任にされたくないと思う気持ちを無視したり、自分から切り離したりすることこそが、差別を放置する構造につながっていきます
- この社会に生きている以上、「まっさらできれいな自分」でいることは、残念ながらできません

- たとえば、低賃金・重労働環境の中でつくられたものをわたしたちは食べ、着、使います
- グローバリズムと資本主義が進む社会のなかで、「誰一人として傷つけない」生き方って本当に存在するの？
- じゃあ開き直ればいいのかというと、それは絶対に、ちがう
- その中でも「より良い選択」をし続ける、失敗したら反省し、謝り、再び同じ道を踏まないように歩く
- わたしたちは、そういう、ある種の「臆病さ」と「切実さ」をもって生きていくこと、それをを繰り返していくしかないのだと思います

- 差別問題に中立はありません

→大したことないとか、取るに足らないとかいう態度は、差別に異議を申し立てない＝黙認していることと同じ。それは加害行為です。

- ▶▶この社会に生きる大人の責任とは？

→子どもたちにどのような社会で生きていってほしいのか。どんな社会であれば、自分が自分であるだけで差別されない社会を作ることができるのか。

- あなたにできることは？

中学生から届いた声

- 澤井さんが自分の(出自の)話を高校で話したとき、思わず泣いてしまうのが、本当に怖かったんだと思います。それを打ち明かす勇氣は、そうとう強い武器だと思いました。その武器は人を傷つけるのではなく、自分を変えるために使うというやり方がカッコいいと思いました。差別は嫌でもなくならない。悲しいことですが、澤井さんが言っていた「自分には何ができるか」を考えてみました。私はいまある差別には間違っていると言い、次の人に託したいと思いました。いまは部落差別は見えなくなりましたが、次は部落差別という言葉が消したいです。次の人に託すのは逃げではなく、賭けてみたいと思ったからです。もちろん、それまでの行き道は自分で作ります。

あなたにできることは何？

変わるべきは、部落出身当事者か、社会の側か。

部落問題は、誰の問題なのでしょうか？
当事者？当事者を囲む私たち社会？

変わるべきは、誰なのか。

ご清聴ありがとうございました！

(参考文献・資料)

阿久澤麻理子 2017 「部落差別解消推進法と学校教育 調査からみる若い世代の意識」奥田均編著『ガイドブック 部落差別解消推進法』解放出版社 pp.80-93.

齋藤直子 2017 「初めての部落問題」『私たちの部落問題』公開授業資料より

Bondy, C. 2015 『VOICE, SILENCE, and SELF Negotiations of Buraku Identity in Contemporary Japan』 Harvard University Asia Center